

川崎市市民ミュージアム収蔵品レスキューの経過と現状

川崎市市民ミュージアム 鈴木勇一郎

はじめに

川崎市市民ミュージアムは、2019年10月12日の台風19号で、地下にある全収蔵庫が水没するなど、大きな被害を受けた。この日以来、ミュージアムでは収蔵品レスキューに業務の大半を費やしてきた。

本稿は、被災してからとりあえず1年間をめどに、歴史と民俗のレスキューに際して私自身が経験したり感じたりしたことを思いつくままに綴ったものだ。

大規模台風襲来の予報があり、10月12日は臨時休館となった。当日、都内の自宅にいた限りでは、通常の台風と同じくらいに感じていた。翌日の午後、地下が水に浸かったので、月曜日に来るように館から連絡が入った。実は、この時点でも「後片づけが大変だ」という程度の認識しか持っていなかった。

1、レスキューの立ち上げ（2019年10月～12月）

10月13日月曜日。館に行ってみると地下は完全に水没し、1階近くにまで水が迫っているという状態であった。

地下の状況の詳細はまるで不明だったが、収蔵庫を含めた地下空間は全没しているという想定で動かざるを得ないということは明らかであった。そうだとすると、市民ミュージアムの職員だけで対処できるような次元の話ではない。そこで10月16日、国立文化財機構文化財防災ネットワーク推進室を中心に全国美術館会議、川崎市役所、当館OB学芸員などを交えて協議し、外部団体による支援や技術的な課題などの話し合いがもたれた。当館の収蔵品レスキューの基本的な枠組みは、ここでほぼ打ち出されたように思う。

さて10月18日になってようやく、地下に降りることができた。当館の博物館部門の収蔵庫は、民俗は第1、考古は第2、歴史は第3収蔵庫という区分けになっている。この時点では、照明はすべて消えている上にひどい臭気が漂い、高い湿度と温度で、長く庫内に留まっていることは困難であった。内部の状況の詳細はほぼつかめない有様だったのである。ようやく23日に照明設備が部

分的に復活すると、収蔵庫内の様子が次第にわかかってきた。特に第3収蔵庫は扉を破って水が浸入し、水流の通り道となった場所にあった資料は広範囲に散乱していたのである。収蔵庫が浸水していること自体は想定済みだったが、こうした状況は想定を超えていた。

いずれにせよ、すべての収蔵庫が浸水したことから、収蔵品をレスキューする作業は私たち市民ミュージアムの職員だけで手に負えるような次元のものではないことは明らかだった。博物館部門は、当初神奈川県博物館協会（以下県博協）を中心に援助を仰ぐことになった。こうして11月以降、週の前半は美術館レスキュー、後半は博物館レスキューという基本的割り振りで作業を進めていくことになったのである。

川崎市には埋蔵文化財センターがないこともあってか、考古の収蔵庫は市の文化財課が基本的に管轄してきた。考古資料についてはレスキューも文化財課主導で行うことになった。民俗資料は、民具など文書史料に比べれば、農具類など耐久性があること、また収蔵庫内の環境が悪いことから当面封印することになった。

だから私たちがまず取り組むことになったのが歴史の収蔵庫、とりわけ古文書類であった。当館が収蔵する文書類は、近世から近代にかけてのものがほとんどだが、分量としては数万点にも及んでいる。あまりにも量が多すぎることもあり、まず全て冷凍してとりあえず劣化を止めることを優先させることにした。本格的な修復などは、その後を考えるということになったのである。

しかし実際は、収蔵庫内には物品や資料などが散乱しており、これらをどかしながら作業用の通路を確保するところから作業を始めなければならなかった。その上で散乱する古文書類を袋に詰める、折りたたみ式の箱に格納する、中庭に設置した冷凍コンテナに入れていく、という流れで作業を進めることになった。とりあえず2019年内はこうした調子で作業が進行していったのである。

2、大規模化するレスキュー（2020年1月～2月）

歴史レスキューが軌道に乗り、美術の収蔵庫か

らの搬出が進んだということもあって、年が明けると、民俗収蔵庫の封印を解いて、民具のレスキューを本格的に始めることになった。

民俗のレスキューに際しては、各地の被災史料のレスキューに取り組んできた国立民族学博物館日高真吾氏を中心とするチームが来館され、1月半ば、その指導の下に実際にレスキュー作業を実施した。さらにそれをもとにマニュアルまで作っていただいた。

具体的には、収蔵庫から出す、水で洗う、乾燥させる、エタノールで消毒する、館内で一時保管するというのが作業の流れであった。

このころから県博協に加えて、国立文化財機構、全国歴史民俗博物館協議会といったそのほかのミュージアム団体からも支援を仰げるようになった。また、修復の専門家にも来ていただくことも多くなった。さらにこうした専門家以外の作業要員として市役所からの応援要員など、いろいろなところから援助を仰げるようになった。ヤマト運輸の美術部門の係員も事実上常駐するような状況となっていた。多い時には一日約80名の人員がレスキューのために動くこともあったのである。博物館のレスキューも、民具だけでなく、歴史や考古のレスキュー作業も同時並行して進んでいたのも、参加人員の把握、各作業の調整、要望への対応などに追われた。

3、コロナ禍のレスキュー（2020年3月～5月）

2月後半ごろから、新型コロナウイルスの影響がレスキュー作業にも出始めた。それはまず消毒用のエタノール不足という形で現れたが、とりあえず水洗いだけで、消毒の工程は省略するという対応でしのいだ。

その後、国立文化財機構など、博物館関係からの派遣が止まり始めた。幸い文書類の冷凍はほぼ目途がつき、このころには美術館部門のレスキューもひとまず山を越えていた。一方、本格的に作業を始めたばかりの民具のレスキューは、比較的素人でも対応しやすいことから、市役所職員の大規模動員を強化することで対応した。それまで所管部局である市民文化局に加えて、川崎市役所全体に呼びかけるようになったのである。こうして多くの市役所職員が連日レスキュー作業に参加するようになったのである。

ところが3月末になると、コロナ禍の影響と年

度の切り替わりの時期のため、市役所からも大規模な応援を得るのは難しくなってきた。代わって作業の主役に躍り出てきたのが、指定管理会社から派遣される支援スタッフであった。こちらも従来から作業に参加していたが、このころから連日大規模に要員が投入されるようになった。

5月前半をめどに、とりあえず収蔵庫からの資料の搬出は終わるのが、以前からの目標であった。実際には4月になっても、収蔵庫には依然として大量の資料が並んでいたのである。

そうした状況の中、緊急事態宣言が出された。当館の職員も在宅勤務が基本になり、レスキューを実施する時だけ館に出てくるようになった。一見すると、作業効率が著しく落ちるようにも思えるが、その分レスキューに集中できたという面もあった。またレスキューの運営に慣れてきたこともあって、作業効率は思ったほどには落ちなかった。

最終的にゴールデンウィーク中に民俗と歴史の資料は、収蔵庫からすべて搬出を終えたのである。

4、夏場以降の作業（2020年6月～10月）

その後は、とりあえず主に運び出した民俗資料の洗浄や乾燥作業を進めた。季節は次第に夏になりつつあったので、民具を水で洗ったりする作業は、冬場に比べてだいぶ楽になった。だが一方で、気温が高くなると、資料の劣化もいちだんと進み、作業環境も過酷になるということは大きな問題であった。とはいえ7月以降、歴史の分野では、いったん冷凍していた古文書類を解凍し、自然乾燥や真空凍結乾燥の段階に進むことができた。さらに秋には民具の洗浄もほぼ終了し、外部倉庫に一時保管するところまで作業が進んだ。

このように一言で収蔵品レスキューといっても、時期によって課題となるものが次々と変化していくのが実情である。しかもこれまで経験したことのない状況への対応がそのほとんどを占めている。残念ながら用意周到に、準備万端にとは、ほど遠い泥縄式の対応を余儀なくされることが少なくない。

いずれにせよ、川崎市市民ミュージアムのレスキュー作業は神奈川県館協会をはじめとする外部の皆さんの多くの支援を得てここまでやってくることができた。だが、残された作業の膨大さからすると、まだ緒に就いたばかりの段階であり、こ

れからも長い時間がかかることはまちがいない。
これまでの皆様のご支援にあらためてお礼を申

し上げるとともに、今後ご指導ご支援を賜わ
ることができれば幸いである。



考古収蔵庫の被災状況



考古収蔵庫でのレスキュー



破損した歴史収蔵庫扉



歴史収蔵庫被災状況



歴史収蔵庫でのレスキュー





歴史資料レスキュー風景



中庭に設置したコンテナで
古文書を冷凍



古文書修復ワークショップ



歴史資料の洗浄



歴史資料の乾燥



歴史資料解体作業



民俗収蔵庫の被災状況



民俗資料レスキュー

